

基礎的な技能習得と準備動作を発揮させるためのソフトバレーボールの実践

—ワンキャッチを認めることの有効性—

Practice of Soft Volleyball to Exert Basic Skills Acquisition and Preparatory Action

—The effectiveness of allowing one-catch—

埴 佐敏 Satoshi Hanawa

(家政学部こどもの生活専攻)

抄 録

本研究の目的は、小6生対象のネット型のゲーム（ソフトバレーボール）において、攻撃のための組み立てを容易にし、バレーボールに繋がる基礎的な技能習得を図るために自陣コート内で1回のキャッチを認めることの有効性を明らかにすることである。

その結果、1回のキャッチにより自陣コート内での組み立てが容易となった。またキャッチの多くはレシーブ場面で行われたことから、セッターへ安定したパスが送られるとともに、セッターの基礎的技能であるトスアップ、それに続くアタック成功率の向上へと繋がった。そして安定したパスやトスが出されることから、技能発揮のための準備動作の出現頻度も向上傾向が見られた。

以上のことからワンキャッチソフトバレーボールは、攻撃のための組み立ての容易化と基礎的な技能習得及び技能発揮のための準備動作の習得に有効であると考えられる。

キーワード

ワンキャッチソフトバレーボール one-catch soft volleyball

攻撃の組立 construction for attack 役割分担 division of roles

準備動作 preparatory action

目 次

- 1 緒 言
- 2 研究計画・内容
 - 2-1 研究対象
 - 2-2 研究期間
 - 2-3 研究計画
 - 2-4 分析項目と分析方法
- 3 研究結果
 - 3-1 レシーブ技能とレシーブ形態
 - 3-2 セッターの技能と準備動作
 - 3-3 アタッカーの技能と準備動作
 - 3-4 ゲームパフォーマンス指数
- 4 考 察
- 5 まとめと課題

1 緒 言

ボール運動のネット型（以下、「ネット型ゲーム」と略す。）は、ネットを挟んで相対するチームがボールを操作し、相手コート内にボールを落とし、一定得点に早く到達することを競い合うゲームである¹⁾。また鈴木²⁾は、ネット型ゲームの最終目的は「ボールを目標地点に移動すること」であり、その目的を達成するために「ボールの確保」と「ボールを目標地点に進める」という2つの課題を同時に抱えていることを指摘している。つまり、ネット型ゲームでは、自陣コート内でボールを操作し、相手の守備を突破することが課題であり、相手コートに「落とす」か、自陣コート内に「落とさない」で「組み立てる」ことが攻防の中心であり面白さになる。

また、バレーボールのような連携プレイ型では「意図的なセットを経由した攻撃」が学習の核になる³⁾。具体的には、「レシーブセット→アタック」の役割行動を理解し、ゲームの中でその役割を果たし、その役割に応じた技能発揮を行うことになる⁴⁾。しかし、空中を移動するボールを弾いたり、レシーブやアタックの技能を行使したりすることは難しく、そのままのルールで行っても子どもたちの技能レベルでは、その実現性は低い⁵⁾。このことは、ボール運動の難しさの一つである判断的行為と技術的行為を同時に発揮しなければならない⁶⁾こととも関連する。バレーボール系で用いるトスやアタック等の技能は非日常的なものであり、その技能習得のみに重点を置いていたのでは、戦術的な課題を解決することはできない。そのため今日では、戦術的な内容を学ぶためにボール操作の制限を緩和することが行われている。その方法として、柔らかいボールを用いて組み立てるソフトバレーボール系とワンバウンドさせたボールを組み立てるプレルボール系の2つに大別することができる。ソフトバレーボール系の場合、柔らかいボールを使用することでボールに対する恐怖心を取り除くことはできるが、空中のボールを操作するという困難さは解決されない⁷⁾。そこでキャッチを取り入れその困難さの解消を図っている。その場合、単元の前半でのみキャッチを認めるもの^{8) 9) 10)}や単元全体をキャッチバレーボールとしたもの^{11) 12)}、あるいはレシーブはキャッチ、トスはホールディング¹³⁾としたものが見られる。一方、コート内でワンバウンドさせ戦術的な行動を易しくできる教材としてプレルボール¹⁴⁾やアタック・プレルボール^{5) 15)}のほか、組み立て中にキャッチとワンバ

ウンドを認めた実践^{16) 17)}などが見られる。

しかし、これらの研究では戦術的課題の追求を容易にすることに重点が置かれ、バレーボールの基礎的な技能習得について述べられているものは僅かではない。小学校学習指導要領解説書¹⁸⁾の第5学年及び第6学年のEボール運動のイ ネット型の技能として、軽くて柔らかいボールを操作したり、相手が捕りにくいボールを返球したりすることが記されている。それに対し中学校第1学年及び第2学年では、ボールを受ける前の準備動作やボールを捉える位置への移動（ステップ）、サービス時のボールを捉える位置（インパクト）やテイクバックをとって肩より高い位置からボールを打ち込むことのほか、味方が操作しやすい位置にボールをつなぐことなどが例示¹⁹⁾され、技能と技能発揮のための準備動作の習得が求められていることが読み取れる。このことから、小学校時代に中学校でのバレーボールに繋がる基礎的な技能を習得しておくことが必要であると考える。

そこで本研究では、レシーブかトスのいずれかでキャッチを認めるワンキャッチのソフトバレーボールを行うこととした。これはレシーブやトスといった非日常的な技能は、小学生には難しいため、1回のキャッチを認めることで自陣コート内での組み立てが容易になる。そして安定した組み立てが技能発揮を容易にするとともに、準備動作の出現に結びつきやすくなることが期待できる。また、キャッチをしなかったプレイヤーは種目特有の技能発揮が求められることから、中学校への繋がりにもなると考えたからである。

北村ほか²⁰⁾は、レシーバーの技能としてセッターへの正確なパス、セッターの場合トスの準備動作として体の向き変え、技能としてアタッカーの打ちやすいトスアップ、そしてアタッカーは準備動作としてアタック前の助走、技能ではアタックの成否を挙げている。荻原ほか²¹⁾もセッターの準備動作としてトスアップ時の体の向き変えとアタッカーの準備動作として助走動作²²⁾が必要であることを指摘し、岩田ほか²³⁾はセッター後方から走り込んできた場合がこれに当たるとしている。また北村ほか²⁰⁾は、「準備」「技能発揮」「ベース（元の位置に戻る動き）」の3観点から技能と準備動作の達成基準を示している。

以上のことから、ボール操作の緩和（レシーブかトスのいずれかでキャッチを認める）がバレーボールに繋がる基礎的な技能習得や準備動作の出現にど

のような影響を与えるのかを検証し、ワンキャッチソフトバレーボールの有効性を明らかにすることが本研究の目的である。

2 研究計画・内容

2.1 研究対象

A市立B小学校第6学年 16名(男子7名, 女子9名)

2.2 研究期間 2013年6月下旬～7月上旬

2.3 研究計画

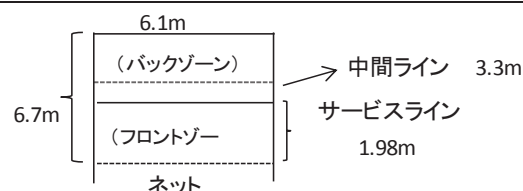
本研究は全7時間扱いで、毎時間基礎技能を習得するためのドリルゲームと基礎技能を活用したタスクゲーム、そしてメインゲームであるワンキャッチソフトバレーボールを行った(表1)。またゲームを行うに当たっての主なルールは表2に示すとおりである^{注1)}。このうち、レシーバーとセッターには努力事項がある。それは本研究ではワンキャッチでゲームを行うが、キャッチを行う場合、レシーバーはアンダーハンドパスの姿勢で両手の平でキャッチし、そのままの姿勢ですぐにパスを出すこと、またトスを行うときは、オーバーハンドパスの姿勢でホールディング様に行うことを心掛けることとした。

2.4 分析項目と分析方法

毎時間行われるメインゲームの時間は6分で、それをビデオ録画し、分析方法について共通理解を図ったのち、筆者(7時間分分析)と現職教員1名(3時間分分析)、体育科教育専攻学生4名(各1時間分分析)がそれぞれ分析し、両者の一致率が80%未満の場合、再度分析を行った。

表2 ワンキャッチソフトバレーボールの主なルール

コート	13.4m×6.1m(体育館のバドミントンコート)
人数	4人1チーム。ゲームは3人でローテーション制。ゲームに参加していない1人は、得点係と味方の動きの指示。
ネット	180cm
ボール	ミカソフトバレーボールsoft100G
基本的ルール	<ul style="list-style-type: none"> ・アタッカーは片手でボールを打つ。 ・自コート内で3回組み立てを行い、相手コートに返球する。 ・サービスはサービスラインから両手で持ち下手投げ。
努力事項	<ul style="list-style-type: none"> ・レシーバーは両膝を軽く曲げ、両手の平でキャッチし、すぐにパスを出す(キャッチングレシーブ)。 ・セッターは肩より上でボールを受け、僅かな時間掴むような感じでトスを上げる(ホールディングトス)。



分析項目のうち、レシーバーの技能は、「アンダーハンドレシーブ」の成否と「ボールキャッチとパス形態」の各比率を、また「セッターへのパス」はセッター位置の1歩以内へのパス・2歩以上移動のパス・パスミスの各比率をそれぞれ比較した。またセッターの技能である「安定トス」は、安定トス・アタック可能トス・トスミスの各比率を、そしてアタッカーの技能である「アタック」については、アタック成功率と得点率の各比率を検討した。一方、準備動作については、セッターはトスアップ時の「ネット近くへの移動」と「体の向き変え」有無の比率

表1 ワンキャッチソフトバレーボール単元計画

第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時
自コート内でしっかり攻撃を組み立て、相手コートに返球する。			正確なレシーブ・トス・アタックで素早い攻防のゲームを行う。			
1. オリエンテーション	1. ・用具の準備 ・準備運動 ・本時の学習内容を知る					
・学習内容や学習の進め方を知る。 ・グループ分けを行う。 ・準備や後始末の仕方を知る。 ・準備運動や練習の方法を知る。	2. ドリルゲーム					
	【ドリルゲーム1】 ○対人アンダーハンドパス ○対人オーバーハンドパス ○円陣パス ○ジャンプボールキャッチ ○壁アタック		【ドリルゲーム1】 ○対人アンダーハンドパス ○対人オーバーハンドパス ○円陣パス			
	【ドリルゲーム2】 ○ジャンプアタック ○サーブレシーブゲーム (サーブ→レシーブ)		【ドリルゲーム2】 ○ジャンプアタックゲーム ○サーブレシーブゲーム(サーブ→レシーブ→トス) ○トス・アタックゲーム(パス→トス→アタック)			
2. ドリルゲーム	3. タスクゲームと話し合い					
【ドリルゲーム1】 ○対人アンダーハンドパス	○2対2ラリーゲーム		○2対2ミニゲーム		○3対2のアタックゲーム	
3. メインゲーム【ワンキャッチソフトバレーボール】						

を、アタッカーはアタック前の「助走（ステップ）」とアタック時の「ジャンプ」の比率を求めた。

これらの技能の成否比率や準備動作の出現比率と単元の進行による比率傾向の有意性はコクラン・アーミーテージ検定 (Cochran-Armitage test) を用いた。分析は Microsoft Excel 2010 で行い、危険率は 5% 未満とした。また技能と準備動作の項目については、北村ほか²⁰⁾のゲームパフォーマンス達成基準を参考に、Memmert²⁴⁾の算出式を用い、指数が 50 以上の場合パフォーマンスが習得されていると判断した。

3 研究結果

3.1 レシーブ技能とレシーブ形態

レシーブの技能は、相手コートからのボールをアンダーハンドで正確に受け止める技能である。アンダーハンドレシーブ比率は、単元前半は 30% 程度であったものが、終盤には 10% を下回るまでに減少し、出現率は有意な減少傾向を示した ($z=-5.47, p<.05$)。その裏返しとなるキャッチによるレシーブ（以後、「キャッチングレシーブ」と表記する。）は有意な増加傾向を示した。また、アンダーハンドレシーブのミス率は単元開始の 1 時が 56.5%，2 時が 42.1% であったものが、終盤の 6 時には 25.0%，7 時には 16.7% となり単元の進行によって有意な減少傾向を示した ($z=-2.54, p<.05$) (図 1)。

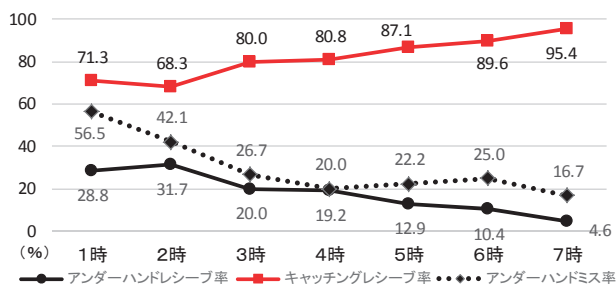


図1 アンダーハンドレシーブ率とキャッチングレシーブ率の推移及びアンダーハンドレシーブミス率

次にレシーブをキャッチで行った場合のキャッチ形態とセッターへのパス形態である。図 2 に示す「下→下」はキャッチに際しアンダーハンド様に両手でキャッチし、そのままの姿勢でパスを出す形態で努力事項 (表 2) に相当するものである。また「上→下」はバスケットボールのチェストパス様に胸の前でキャッチし、セッターへのパスは両手で下手投げのパスを出す形態である。キャッチとパス形態で最も多いのは「上→下」型、つまりチェストパス様でキャッチし、アンダーハンド様でパスを出す形態で

ある。授業開始当初は 60% を超えていたものが、終盤の 6 時には 53.3%，7 時には 51.3% と減少を示した。しかし、減少率に有意な直線関係は認められなかった ($z=-0.96, ns$)。またアンダーハンドパス形態に最も近い「下→下」型の比率は次第に増加傾向を示した (1 時：29.8%，7 時：41.5%) が、増加率に有意な直線関係は認められなかった ($z=1.34, ns$) (図 2)。

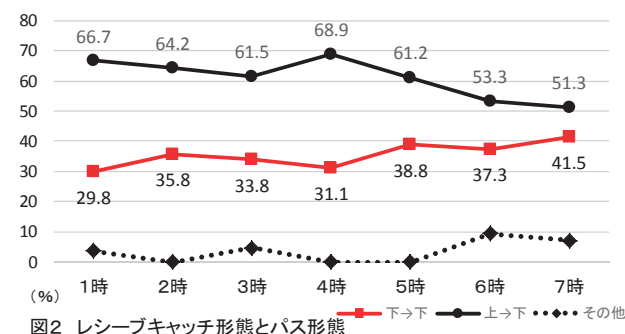


図2 レシーブキャッチ形態とパス形態

レシーバーの大きな役割は、セッターがトスを上げやすいパスを送ることである。そのためには、セッターの位置に近いところにパスを送らなければならない。

そこで、レシーバーからのパスをセッターがどこで受けたか (セッター位置の 1 歩以内、2 歩以上移動、パスミス) の比率を比較した。セッターへの正確なパスに当たる 1 歩以内のパス率は、1 時が 65.7%，2 時が 70.3% であったものが、6 時には 88.4%，7 時には 90.7% に増加し、増加率は有意な直線関係にあることが認められた ($z=5.36, p<.01$)。またパスミスの減少率も有意な直線関係が認められた ($z=-5.30, p<.05$) (図 3)。

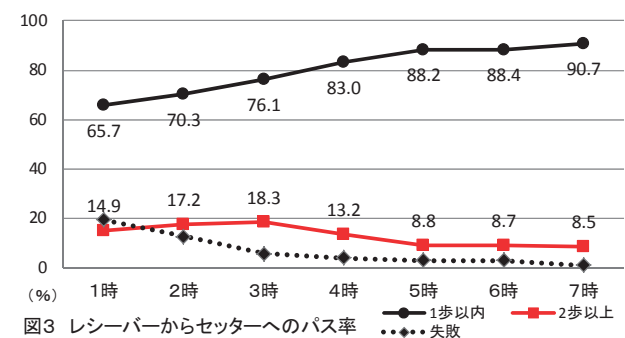
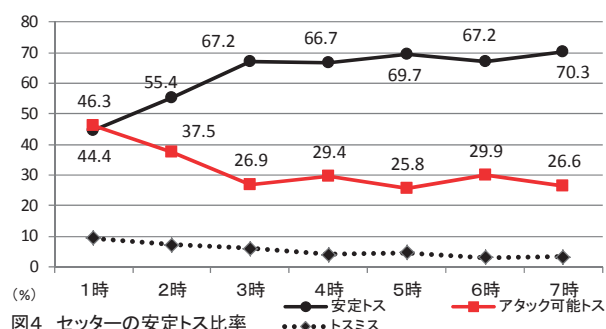


図3 レシーバーからセッターへのパス率

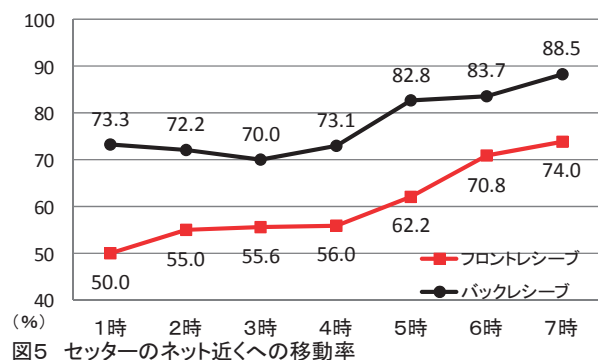
3.2 セッターの技能と準備動作

セッターの技能は、アタッカーの打ちやすいトスを上げることである。ここではアタックを打ちやすいトスである「安定トス」、移動しアタックを打つことができた「アタック可能トス」、それに「トスミス」

の3種類の出現頻度で比較した。安定トス率は1時が44.4%，2時が55.4%であったものが，授業後半には70%前後まで増加し，授業の進展に伴い有意な増加傾向を示し ($z=3.18$, $p<.05$)，反対にトスミス比率は有意な減少傾向を示した ($z=-1.99$, $p<.05$) (図4)。



セッターの準備動作にはトスアップのためのネット近くへの移動とトスアップに際しての体の向き変えがある。ネット近くへの移動率をフロントゾーンとバックゾーンでレシーブした場合に分けて比較したところ，フロントゾーンでのレシーブの場合，1時の50.0%が7時には74.0%にまで増加し増加率に有意な直線関係が認められ ($z=2.47$, $p<.05$)，またバックゾーンでのレシーブの場合も同様の関係が認められた ($z=3.17$, $p<.05$) (図5)。



またトスアップ時の体の向き変えであるが，これもフロントゾーンとバックゾーンでレシーブした場合に分けて検討してみた。フロントゾーンでのレシーブの場合，1時は8.7%，2時は17.2%であったものが，6時には37.5%，7時には42.6%となり，増加率に有意な直線関係が認められた ($z=3.60$, $p<.05$)。一方バックゾーンでのレシーブの場合，1時は54.8%と最初からやや高い値を示し，7時には71.6%と増加を示したが，増加率に有意な関係は見られなかった ($z=1.77$, $p<.05$) (図6)。

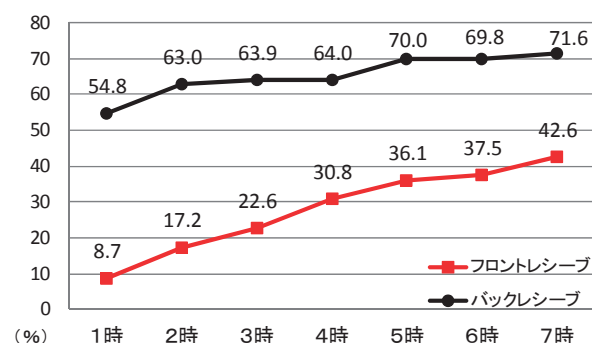


図6 トスアップ時の体の向き変え

3.3 アタッカーの技能と準備動作

アタッカーの技能は，相手コートに正しく返球し，相手コートにボールを落とすか，相手チームがレシーブできないアタックを打つことである。そこで，アタック成功率と得点率の推移を比較してみた。まずアタック成功率は1時のみ70%を下回っていたが，その後70%，そして終盤には80%を超え，増加率において有意な直線関係が認められた ($z=2.80$, $p<.05$)。一方得点率は1時の25.8%から6時には37.0%，7時には36.6%と増加したが，増加率に有意な関係は認められなかった ($z=1.40$, ns) (図7)。

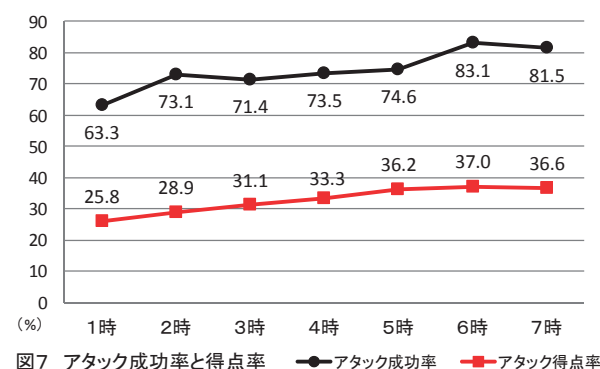


図7 アタック成功率と得点率

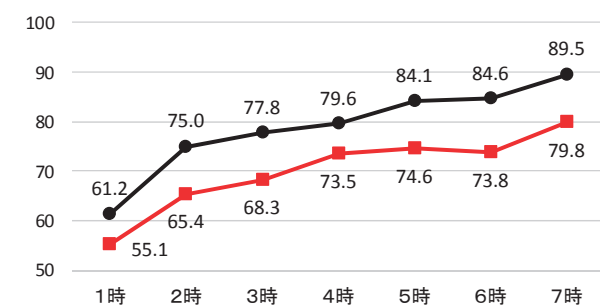


図8 アタック準備動作の出現率の推移

アタッカーの準備動作としては，アタックを打つ前のステップ（助走）とアタックを打つためのジャンプがある。ステップの出現率は単元開始時の61.2%が終了時には89.5%に増加し，増加率に有意な直線関係が見られた ($z=4.31$, $p<.05$)。またジャ

ンプ率も単元の進行とともに有意な直線関係が認められた ($z=3.36$, $p<.05$) (図8)。

3.4 ゲームパフォーマンス指数

ゲーム中のパフォーマンス指数が高かった項目として、レシーバーの技能としてのセッターへの正確なパス、セッター技能としての安定トス、準備動作としてバックゾーンでレシーブした場合のネット近くへの移動、アタッカーの技能としてのアタック成功率、準備動作としてのステップ率がある。反対にセッターの準備動作であるフロントゾーンでレシーブした場合の体の向き変えとアタッカーの技能であるアタック得点率は低い指数であった (表3)。

4 考 察

本研究は、レシーブかトスのいずれかでボールキャッチを認めることによって、基礎的な技能習得や準備動作の出現に繋がりがああるかを明らかにすることを目的として行った。

まずレシーブ時のキャッチ頻度が有意に増加していた。このことは、キャッチによりボールをしっかり受け止め、トスアップしやすいボールをセッターに送っていたと考えられる。一方、アンダーハンドレシーブのミス率の減少は、アンダーハンドレシーブ技能の向上だけでなく、単元開始当初はレシーブが難しいボールに対してもアンダーハンドレシーブを試みていたものが、次第にそれが可能と思われるボールに対してのみ行うようになったことが影響していると考えられる。

また、レシーブの大半を占めていたキャッチングレシーブの場合、キャッチ時の姿勢及びその後のパス形態は、アンダーハンド様に両手でキャッチし、そのままパスを出す(「下→下」型)の出現率より、チェストパス様に胸の前でキャッチし、下手でパス

を出す(「上→下」型)の出現率が多かった。授業中にアンダーハンドパスの練習等を通し、いわゆる「中腰姿勢」²⁵⁾である膝を曲げて待つことを指導したが、実際にキャッチを行うとなると、胸元の方が行いやすく、さらにアンダーハンド様でのキャッチはボールを落とす可能性があることから、動きの習得として困難であったのではないかと推察される。もう一つ、レシーバーの技能としてセッターへの正確なパスがある。本研究では、セッターへの正確なパス率が有意に向上したのは、レシーブ技能の向上という面だけでなく、レシーブをキャッチで行った影響が大きいと考えられる。

セッターの技能としては、アタッカーが打ちやすいトスを上げることである。安定トスはアタッカーのいる位置からほぼ容易にアタックが打てるトスで、この比率が有意に増加したことやゲームパフォーマンス指数も高い値を示したことから、トス技能は向上したと考えられる。このことは、ホールディング様を許容することで、ボールを弾くというバレーボール特有の技能を用いてのゲームが可能であることを示唆している。

また、セッターの準備動作としてネット近くへの移動とトスアップ時の体の向き変えがある。ネット近くへの移動について、レシーブ位置がフロントゾーンであれ、バックゾーンであれネット近くへの移動率が向上した。特にセッターの役割を担うためにフロントゾーンにいた子どもがレシーブした場合、授業開始当初はレシーブしたセッター役の子どもがバックゾーンにいる子どもにパスを出すことがよく見られていたが、次第にバックゾーンにいた子どもがセッターの役割を果たすためにネット近くに移動してきたことが移動率の向上に繋がったと考えられる。一方、体の向き変えはフロントゾーンでのレシーブの場合、増加率に有意な関係が見られたが、パ

表3 ゲーム時のパフォーマンス指数

役割	発揮種類	発揮状態	1時	2時	3時	4時	5時	6時	7時	平均
レシーバー	技能	レシーブ成功	46.5	53.8	60.0	60.0	58.6	57.1	57.7	61.8
		正確なパス	61.6	65.1	70.0	74.0	79.5	79.8	85.2	80.3
セッター	準備動作	安定トス数	69.4	74.5	79.7	78.6	81.2	82.1	87.7	90.5
		ネット近く移動(フロントレシーブ)*	50.0	52.5	53.2	53.3	57.9	61.4	67.1	61.2
		ネット近く移動(バックレシーブ)*	64.0	64.3	63.3	63.0	69.4	73.0	80.6	77.5
		体の向き変え(フロントレシーブ)*	27.9	30.6	33.3	39.1	41.1	43.2	44.6	31.7
		体の向き変え(バックレシーブ)*	52.9	57.4	58.9	57.8	62.0	63.5	67.0	65.4
アタッカー	技能	成功率	59.4	66.7	66.3	66.7	68.7	75.3	77.1	74.6
		得点率	35.3	36.2	36.9	39.3	40.3	40.5	38.8	34.7
	準備動作	ジャンプ率	53.6	61.1	63.9	66.7	68.7	68.2	75.7	70.9
		ステップ率	58.0	68.1	71.1	71.0	75.9	76.5	84.0	79.6

*:「フロントゾーン内でのレシーブ」「バックゾーン内でのレシーブ」を意味する。

パフォーマンス指数は単元の全時間を通して 50 に満たず、準備動作として習得されたとは言い難い。これはフロントゾーンでのレシーブの場合、同一ゾーン内でのパスとなり、トスアップに際し体の向きを変える必要があまりなかったことによると考えられる。

最後にアタッカーである。アタッカーの技能は相手コートへの返球とアタックによる得点である。本研究ではアタック成功率は有意な向上を示し、ゲームパフォーマンス指数も高い値を示した。このことから、アタックの技能はこの時期の子どもたちにとって獲得していくことが可能な技能と考えられる。ただこれは、あくまでもアタッカーが打ちやすい安定トスが上がっていることが前提であり、そのことから考えるとトスアップ時にキャッチ、あるいはホールディング等を用いることは、アタック技能発揮のために有効になるのではないかと考えられる。一方得点率は有意な向上が見られず、ゲームパフォーマンス指数も 40 未満がほとんどで技能定着の基準に至っていない。しかしこれは、レシーブの多くがキャッチで行われているため、本来アンダーハンドレシーブではレシーブができず、得点になるようなアタックもキャッチであればミスに繋がりにくかったことが影響していると考えられる。

またアタッカーの準備動作であるステップとジャンプの出現率は両者とも有意に増加し、ゲームパフォーマンス指数も高い値となった。これはドリルゲームでジャンプボールキャッチやジャンプアタックゲームを行い、アタックに際してはステップやジャンプが必要であることを学習してきた成果ではないかと考えられる。しかし実際に子どもたちの様子を観察すると、アタック前にステップを行ってもジャンプをせずにアタックを打ったり、反対に助走をせずその場でジャンプしてアタックを打ったりするなど、アタックを打つためにこの 2 つの準備動作が必ずしも一体となって行われていたわけではない。ステップ→ジャンプ→アタックの一連の動きを行うにはタイミングを合わせる必要がある。本研究では、ネットも決して高くないことからジャンプをせずにアタックを打つ場合が含まれていたことから、タイミングを合わせてアタックできるようにするために、ジャンプアタックゲームの種類を複数準備しておくことが必要ではないかと思われる。

5 まとめと課題

連携プレイ型のネット型ゲームの楽しみは、攻撃のために自陣コート内で組み立て、そのボールを相手コートに「落とす」(相手チームからすると「落とさない」)ようにすることである。そしてゲームを楽しむために必要な基礎的な技能の習得とその技能を効果的に発揮するための準備動作の習得が求められる。本研究ではレシーブかトスのいずれかでキャッチを認めたワンキャッチソフトバレーボールにおいて基礎的な技能習得と準備動作の出現がどのように関連しているかを検討した。

その結果、ワンキャッチ場面はほとんどがレシーブで行われていたことから、セッターへは安定したパスが可能となった。またセッターのトスアップに際し、ややホールディング様も許容していたことから、アタックを打ちやすいトスを上げることができ、アタック成功率が高まっていった。つまり、ワンキャッチを認めたことで基礎的な技能習得が図られたと言える。

セッターの準備動作のうちレシーブがバックゾーンでは体の向き変え率の高いパフォーマンス指数、フロントゾーンではその比率の有意な増加、さらにはアタックに際してのステップやジャンプの出現率の有意な増加やゲームパフォーマンス指数の増加が見られた。このことは、技能を効果的に発揮するための準備動作が行われていたことを示している。

以上のことから、自陣コート内で 1 回のキャッチを認めることは、組み立てを容易にし、技能発揮やそれに伴う準備動作の出現に有効であったと考えられる。

ただ本研究においてはアンダーハンドレシーブ率が授業の進展に伴い減少した。基礎的な技能であるアンダーハンドレシーブをいつどのような場面で指導するのか、例えば単元前半は「下→下」型に限定してのキャッチを認め、後半はアンダーハンドレシーブを試みさせる。ただその際はレシーブミスしたボールをキャッチし、セッターにパスを送るレシーバーカバーなどの補助プレイを入れる方法も考えられるが、このことは今後の課題である。

附記 本稿は、第 40 回日本教科教育学会で発表した内容に新たな知見を加え、加筆修正したものである。

注

- 1) ワンキャッチソフトバレーボールは、レシーブかトスアップ時のいずれかでキャッチを認めているが、レシーブとトスアップ時の両方でキャッチを行ったときは反則となり、相手チームの得点となる。

引用文献

- 1) 荻原朋子, 2002, ネット型ゲームの教材づくり・授業づくり, 新版体育科教育学入門, 大修館書店, 197-209
- 2) 鈴木理, 2018, 球技における攻撃と防御の認識論的検討, 体育・スポーツ哲学研究, 40(1), 25-33
- 3) 岩田靖・北原裕樹・中村恭介・佐々木優, 2009, 学びを深める教材づくり もっと楽しいボール運動③「ダブルセット・バレーボール」の教材づくり, 体育科教育, 57(12), 大修館書店, 60-65
- 4) 岩田靖, 2012, 体育の授業をつくるー運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めてー, 大修館書店
- 5) 岩田靖・竹内隆司・平川達也, 2009, 学びを深める教材づくり もっと楽しいボール運動④「アタック・プレルボール」の教材づくり, 体育科教育, 57(2), 大修館書店 58-63
- 6) 岩田靖, 2008, 子どもの積極的参加と学習成果を促す教材づくり, 体育科教育, 56(5), 大修館書店, 50-53
- 7) 中井隆司・高田美香・岩田博輔, 2008, ネット型ゲームに必要な戦術的課題を学ぶ実践開発とその可能性ー抽出児童の学びの過程分析からー, 奈良教育大学紀要, 57(1), 157-168
- 18) 文部科学省, 2008, 小学校学習指導要領解説 体育編(平成20年8月), 株式会社東洋館出版社, 74
- 19) 文部科学省, 2008, 中学校学習指導要領解説 保健体育編(平成20年7月), 株式会社東洋館出版社, 84
- 20) 北村政弘・岡出義則・近藤智靖・内田雄三, 2014, 小学校中・高学年におけるネット型ゲームのゲームパフォーマンスに関する達成基準の事例的検討, 体育科学研究, 30(1), 日本体育科教育学会, 1-16
- 21) 荻原朋子・西山正広・木塚範昭, 2009, 中学校におけるネット型ゲームの授業モデルーオーバーハンドパスを中心にー, 体育科教育, 57(4), 大修館書店, 52-55
- 22) 荻原朋子, 2014, ネット型ゲームにおけるボールを持たない動きとは, 体育科教育, 62(2), 大修館書店, 76-77,
- 23) 岩田靖・中村恭之・北原裕樹・吉田直晃: もっと楽しいボール運動⑤「アタックプレルボール」の教材づくり 2, 体育科教育, 57(4), 大修館書店, 64-69
- 24) Memmert, D.: The Game Performance Assessment Instrument(GPAI): Some Concerns and Solutions for Further Development. Journal of Teaching in Physical Education, 27, 220-240, 2008
- 25) 進藤省次郎: バレーボール初心者に対するパスの技術指導, 北海道大学大学院教育学研究科紀要, 89, 53-72, 2003

参考文献

- 8) 松坂仁美, 小学校体育におけるソフトバレーボールの教材化への一試案, 美作大学・美作短期大学部紀要, 49, 2004, 69-74
- 9) 田中勝行, 「かかわりあい」を重視したソフトバレーボ

ールの授業, こどもと体育, 140, 光文書院, 2007, 6-11, 10) 菊池健, 「落とす」「組み立てる」「落とさせない」の局面に学びを焦点化した授業づくり, こどもと体育, 150, 光文書院, 2009, 6-11

- 11) 河野裕一, 運動の特性に触れた楽しさを味わいながらゲームの質を高める指導の工夫ー「キャッチバレーボール」(第5学年)の実践を通してー, 埼玉大学教育学部附属小学校平成23年度小学校教育研究会研究紀要(体育科), 2011, 6-11
- 12) 塙佐敏, ネット型ゲーム導入としてのキャッチバレーボールの有効性, 日本教科教育学会誌, 36(3), 2013, 1-12
- 13) 塙佐敏: 小学校体育において連係プレーの成立を図るためにボール操作の制限を緩和したソフトバレーボールの実践ーキャッチングレシーブとホールディングトスを用いることの有効性ー, 日本教科教育学会誌, 38(2), 2015, 91-102
- 14) 小林淳司: 新しいボールゲームの授業づくりプレルボール, 体育科教育, 58(3), 大修館書店, 2010, 100-105
- 15) 鎌田望・斎藤和久・岩田靖・北村久美, 小学校体育におけるネット型ゲームの教材づくりに関する検討ー「連係プレイ」の実現可能性からみたアタック・プレルボールの分析ー, 教育実践研究(信州大学教育学部附属教育実践総合センター), 6, 2005, 111-120
- 16) 小林大吾, スパイクが打てる楽しさに重点を置いたバレーボールの授業実践とその評価ー三段攻撃に近い動きが頻出する小学生対象の課題ゲームの開発を通してー, 兵庫教育大学教職大学院教育実践リーダーコース実践研究報告書要旨, 2013, 1-2
- 17) 丸山雄一郎, 競争課題を中核に据え技術・戦術を高める指導ーソフトバレーボール風ゲームの実践よりー, 上越教育大学教育実践研究(体育科), 2013, 175-180

(原稿受理年月日 2019年10月10日)